

李白と常建の「春夜洛城に笛を聞く」

報告:花岡風子

本日第一首目のお題は、李白の名作中の一つ『春夜洛城に笛を聞く』でした。李白の詩はこれまでも幾度となく取り上げられ、その人生もご紹介して来ましたが、この詩は彼が故郷を後にして放浪の旅を続け、長安の都にたどり着く数年前、洛陽に立ち寄った時のものとされています。当時洛陽は長安に次ぐ大都市でした。

chūn yè luò chéng wén dí lǐ bái

春夜洛城聞笛 李白

shuí jiā yù dí àn fēi shēng

谁家玉笛暗飞声

sàn rù chūn fēng mǎn luò chéng

散入春风满洛城

cǐ yè qǔ zhōng wén zhé liǔ

此夜曲中闻折柳

hé rén bù qǐ gù yuán qíng

何人不起故园情

春夜洛城に笛を聞く

誰が家の玉笛か暗に声を飛ばす

散じて春風に入りて洛城に満つ

此の夜曲中折柳を聞く

何人か故園の情を起こさざらん

いつになく寝つかれない宿の寝床の中で、何度も寝返りを打つうち、何処からともなく漏れ聞こえる笛の音にハッとすると、そんな作者の姿が浮かびます。聞き入っているうちに、調べは別れの曲を奏で始め、別れた家族や友人の顔が次々と思ひ浮かぶ。やがて枕に顔を埋めるよう

なしぐさが連想され、もの悲しげな笛の音と春風の音に入り混じり、作者の深い吐息までもが聴こえてくるような詩です。「李絶杜律」と言われるように、杜甫が律詩を得意としたのに対し、李白は絶句を得意としていました。この詩も李白得意の見事な絶句と言わざるを得ません。

「折柳」または「折楊柳」という言葉は漢詩の常套句の一つで、「別れ」を意味します。柳の枝を折って旅立つ相手への餞にするという風習からきたものとされています。また「故園の情」と言うのは「望郷の念」のことで、漢詩ではよく使われるそうです。

思い起こせば、中国語を習い始めた頃「花落有意，流水无情」という言葉が、片想いを表すと知って、中国語にとってもロマンを感じたことがありました。中国人は現実を重んじる民族であるとよく言われますが、その歴史はロマンに満ちていて、そのロマンを紡ぐ言葉にも魅力を感じます。

植田先生が「この折柳からどうしても連想せざるを得ない」と、かつて取り上げた、王之涣の『涼州詞』と題する辺塞詩をホワイトボードに板書されたのを皆で音読しました。

huáng hé yuǎn shàng bái yún jiān

黄河远上白云间

yī piàn gū chéng wàn rèn shān

一片孤城万仞山

qiāng dí hé xū yuàn yáng liǔ

羌笛何须怨杨柳

chūn fēng bú dù yù mén guān

春风不度玉门关

声に出して読んでみると、黙読とは違う世界が広がります。音の世界は心を揺さぶるものがありますね。この詩の三句目の「怨楊柳」は別れを恨む、という意味で使われています。

「王之渙は実際に辺境の地に行った形跡はないんですよ。当時、辺境に近い涼州で流行っていた歌をモチーフにして、絶句体で書かれたものですが、同じ題名でこの類のものはたくさんあります。さてこの詩は、文法的に考えれば考えるほど意味がよく分からないけれど、荒涼とした大地と、春風も吹かないような寂しいところに行く友を送る、という心情だけはヒシヒシと伝わりますね」。「♪はるばる来たぜ函館」などと、函館に行ったことがない人が歌うカラオケと同じだね。」の一言には、この歌、アラフォー世代の女子にはなじみの薄い歌かなと思いつつ、周りで笑っていらっしゃる先輩方の面々をチラ見しておりました。(笑)

二首目はその辺塞詩とのつながりから、常建という詩人の『塞下曲』其二が取り上げられました。この詩はどういうわけか、中国より日本で有名で、詩吟では定番になっているそうです。というのも、昔から日本人に親しまれてきた『唐詩選』に載っているからでしょうか。しかし中国人の好んで読む『唐詩三百首』には載っていないせいか、中国ではさほど有名ではないのだそうです。中国では同時期に作られた『塞下曲』其一の方がよく知られています。

作者の常建は生卒年不詳です。若い頃、科挙に合格したものの、役人生活が性に合わず、隠遁生活を送った人らしいです。李白のような超天才詩人はともかく、一般にお役人として出世しなかった人は記録が残らず、詳しいことは伝わりにくいようです。いずれにせよ、盛唐の詩人であることだけははっきりしています。年齢は李白より年下、杜甫より年上であったであ

ろう、とのことですよ。

sāi xià qǔ qí èr cháng jiàn

塞下曲其二 常建

běi hǎi yīn fēng dòng dì lái

北海阴风动地来

míng jūn cí shàng wàng lóng duī

明君祠上望龙堆

dú lóu jiē shì cháng chéng zú

髑髅皆是长城卒，

rì mù shā chǎng fēi zuò huī

日暮沙场飞作灰。

一句目は「北海の陰風地を動かし来たる」という何となく不気味な始まりです。北海というのは海ではなく、北の方にあると思われていた湖のことで、実際には北方の砂漠地帯を連想させます。そこから立ち上る風が大地を這うように、砂嵐を起こしつつ迫ってきます。「中国語では風が吹くことを『刮風』と言いますが、髭を剃るのも『刮脸』と言いますね。『吹风』という言い方もありますが、これは春風という感じですね。」と植田先生。なるほど北方の風の吹き方は南方の春風のような穏やかなものではなく、大地の砂を吹き上げるような、つまり大地ごと動くような吹き方なのだと、改めて思わされました。

二句目は「明君祠上龍堆を望む」とあります。これは、漢代の悲劇のヒロイン王昭君の墓から、龍堆（龍のようにうねる砂丘）を見渡すこと。そして三句目は一転して「髑髅は^{とくろ}は^{ことごと}く是れ長城の卒」と続きます。そこには長城に駆り出された兵卒たちの髑髅があちこちに転がっている。そして最後はその髑髅が「日暮砂場に飛んで灰と作る」。つまり、その髑髅が夕闇迫る戦場に砕け散って灰となっている、というのです。荒涼

とした凄まじい光景ですね。なお「沙場」には戦場という意味もあります。

これも七言絶句で、まるで絵に描いたような「起承転結」で構成されています。最後の句で骨が灰となって砂に混じり、それがまた一句目の「北海の陰風」へと返ってきます。「戦争の悲惨さを強調した詩ともいえますね」と、植田先生。常建も辺境の地に実際赴いた経歴はなく、悲惨な砂漠の光景を頭の中でイメージして作った詩のようです。

「でも、頭の中で作った詩が悪いわけではないですよね。」「リズムがよく朗読しやすい詩でもあります。」と植田先生。『塞下曲』という題名の作品も『涼州詞』と同様、流行歌として多くの詩人達が手がけています。ちなみに同一作者の『塞下曲』其一は凱旋を讃え、平和の喜びを詠っています。

さて、今朝アラフォー女子は朝の散歩で久しぶりに、12月初旬の枯れ落ち葉を踏んで歩きました。足元で立てるパリパリと乾いた音を聞いていると、「失意は落ち葉に似ている」、ふと、そんな思いが込み上げてきました。落ちた時は色とりどりだった落ち葉もやがては色褪せ、乾き、砕けて土になる。人間も同じじゃないか、と思いました。大きいのも小さいのも、立派なものもそうでないのも、最後は土になる。それが自然の摂理なのだ、と。

人は心の中の風景と同じものを外に見、そして空想する。だとしたら、自身は都に居ながらも、辺境のどこまでも続く荒涼とした砂漠と、人知れず朽ち果て、やがて砂になる人骨を空想している常建の心の内は、きっと失意に満ちていたに違いないと思うのです（このところは漢詩になりそう?）。

役人として、うまく立ち回ることが出来なかった不器用な人物と、その失意が、やはり世間

で器用に立ち回れない不器用なアラフォー女子の自分と重なり、ことのほか、この詩人のやるせなさが胸に迫りくるのです。

最後にもう一首、すでにお馴染みの辺塞詩を、先生は復習の材料として板書されました。

liáng zhōu cí wáng hàn

涼州詞 王翰

pú táo měi jiǔ yè guāng bēi

葡萄美酒夜光杯

yù yǐn pí pá mǎ shàng cuī

欲饮琵琶马上催。

zuì wò shā chǎng jūn mò xiào

醉卧沙场君莫笑，

gǔ lái zhēng zhàn jǐ rén huí

古来征战几人回。

葡萄の美酒 夜光の林

飲まんと欲して琵琶 馬上に催す

酔うて沙場に臥す 君笑う莫れ

古来征战 幾人が回る

「これも辺境の地をイメージしながら、想像から生まれた詩でしょう。王翰は科挙に合格しながらも、終始飲んだくれの人生を送った人で、自ら辺境に赴いたという形跡は見当たりませんね。それに、辺境に駆り出された兵士たちが、実際、馬上で葡萄の美酒、つまり高級ワインを、これまた稀少で高価な夜光の杯で飲んだとは思えませんしね。」と、植田先生。

先生のお話しに頷きながらも、一方、死の世界へと赴く兵士の凄まじいまでの虚しさが、美しい短編フィルムのような口マンにまで昇華されたこの詩は、やはり名作中の名作だなあ、とため息をつく私でした。